特集にあたって

慶應義塾大学医学部内科学（消化器） 金井　隆典

近年，「腸内細菌」，「腸内フローラ」といった言葉がメディアで頻繁に取り上げられるようになり，ある種のブームの様相を呈し，医学と関わりのない生活をしている人々にまで普及しつつある。一昔前には身近に肥溜めがあり，畑には堆肥がまかれ，汲み取り式便所からくみ上げ作業を行うバキューム車が街中を走っており，ヒトと糞便の距離感は近かった。しかし，上下水道の普及と相まって衛生環境の整備が進み，「臭いものには蓋」がされるようになってきた。そのなかで，「糞便」＝「汚いもの」という認識がされてきた。店頭に並ぶ消臭剤・除菌剤の豊富な品揃えは，まさにこのような考え方の現れだろう。

その一方で，アレルギー疾患・慢性炎症性疾患の増加や肥満率の上昇などに伴って，行き過ぎた衛生環境の追究がその一因として考えられるようになった。これらの病因に対する基礎医学研究の進展に伴って，腸内環境に注目が集まるようになってきた。一昔前には汚いものの代表とされた糞便が，花の女神であるFloraという言葉を冠して，現代人にもたらされた福音のように扱われていることは実に興味深い。

このような形で腸内細菌の存在に注目が集まる前から，ヒトは無意識のうちに食物を通じて腸内細菌叢の統御・改善に努めてきた。ブルガリア伝統のヨーグルトが，不老長寿の秘薬として欧州でもてはやされるようになり世界に広まった例をあげるまでもなく，韓国のキムチ，日本の納豆・鮒ずし・漬物など，いわゆる善玉菌摂取によって腸内細菌叢の改善につながり得る伝統的な食品は多数知られている。ヒトだけでなく，動物界でも腸内細菌をうまく取り込んでいる生き物は多い。たとえば，コアラは生まれてきた子供に母親の便を食べさせて，主食のユーカリを消化するために必要な細菌を子に与える。これと同様に，ツメバケイという，木の葉を主食とする鳥は，親から子に口移しで食べ物を与えることで，葉の消化吸収に必要な細菌を一緒に与えている。

今回の特集では，世界的な研究成果を数多く報告されている基礎研究者の先生方に免疫・感染防御の側面から基礎医学的な解説をしていただき，臨床医学的な側面については，現代病の代表ともいえる肥満という代謝疾患との関連の解説からお願いした。続いて，

Introduction.
Takanori Kanai（教授）

SAMPLE

Copyright(c) Medical Review Co.,Ltd.